

NJ 素流協 News

令和 7 年12月10日
第 251 号

令和 7 年12月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園 1 丁目3-6 (農林会館 5 階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <https://www.soryukyo.or.jp>

組合主催「ニュージーランド林業視察研修報告」前編

ノースジャパン素材流通協同組合
経営企画管理部経営管理課課長 立花 由美

この11月、ノースジャパン素材流通協同組合では、海外の林業の取り組みから学び、今後の事業運営に活かすことを目的として、組合企画による初の海外林業視察研修を実施しました。

視察先はニュージーランド。

大規模な植林事業と機械化や安全対策等において先進的な林業経営が行われており、また、ラジアータ・パインを中心とした大規模な森林経営と加工の一貫体制は、国内林業との比較において多くの学びが得られると考えました。

視察メンバーは、現地視察先との交渉・調整をお引き受けいただいた(一社)日本木質バイオマスエネルギー協会会長・東京大学名誉教授の酒井秀夫氏はじめ、組合員及び賛助会員12名、組合からは営業企画部部長小野寺並びに松島

及び立花の総勢16名でニュージーランドを訪問しました。

□ 行程

今回の研修は、ニュージーランド北島のみを巡る行程としました。成田空港からオークランド空港に到着後、現地在住の林業専門コンサルタントで通訳としてご同行いただいた松木法生氏と合流し、国内線でネイピアへ移動し現地視察、バスでロトルア方面へ移動して各視察先を訪問し、国内線で再びオークランドへ戻りました。最終日はバスでワイポウア・フォレストを



訪れ、北島の主要な林業関連地域を効率的に巡ってきました。

視察行程

11月8日	成田空港発
11月9日	オークランド空港着 国内線移動
11月10日	Pan Pac 社
11月11日	Waratah 社工場、FGR 社、ATL 社、SCION
11月12日	Port Blakely 社伐採現場
11月13日	ワイポウア・フォレスト、カウリ博物館
11月14日	オークランド空港発 帰国

□ ニュージーランド

ニュージーランドは南太平洋の島国で、北島と南島の二島から成り、温暖な気候と多様な自然環境に恵まれています。英国文化の影響と先住民マオリの伝統が融合し、独自の文化を形成しています。政治・経済は安定し、環境保全意識も高い国です。地形は森林資源にも大きく影響し、北島は火山灰土壌が広がり、ラジアータ・パインなど成長の早い人工林の造成に適しています。南島はサザンアルプスを中心に気候・土壌条件が多様で、地域により異なる森林環境が

見られます。沿岸部の平野は植林や素材生産に適しており、地形特性に応じた森林管理が行われています。

ロ ニュージールランドの林業

ニュージーランドの林業は、同国の主要産業として長年発展してきました。特にラジアータ・パインを中心とした大規模な人工林は世界でも有数で、植林から伐採・輸送まで一貫した効率的な生産体制を整えています。計画的な造林と徹底した資源管理により、高い生産性と持続可能性を両立している点が大きな特徴です。

近年は労働安全の強化が最重要課題とされており、林業作業に伴う事故削減に向けた仕組みづくりが進んでいます。作業手順の標準化、安全教育の徹底、リスクアセスメントの導入などに加え、人が危険区域に立ち入らない作業体系への転換が図られています。

その中心となっているのが高性能林業機械による機械化の推進です。10年ほど前、林業現場では労働

災害による年間の死亡者が30名を超える深刻な状況であったとのこと。そうした危機的状況を受け、業界全体が強い危機感を共有し、

安全性向上を最優先課題として認識した結果、人が危険区域に入らない仕組みづくりを目指して、伐採作業の自動化・機械化への取り組みが一気に加速し、現在の高い機械化率につながったそうです。現在では、伐倒、造材、集材、積み込みの多くが機械で行われ、オペレーターはキャビン内から安全に作業できる環境が整備されています。とくに造材作業ではハーベスタやプロセッサの導入が進み、危険な手作業を極力減らす方向で産業全体が動いています。

また、輸送インフラや港湾設備も整備され、丸太・製材品の輸出が国の経済を支える重要な柱になっています。再造林の義務化や国際認証（FSC等）の取得も進んでおり、環境配慮型の森林経営が制度面から支えられています。

PAN PAC FOREST PRODUCTS LTD (ネイピア)

視察1か所目、北島南部ネイピア、ホークス・ベイのフィリナキにあるPAN PAC FOREST PRODUCTS LTD社(以下、PAN PAC社と表記)へ到着、副社長の花山秀文氏、SANDALL氏から同社の概要や山林



話者 花山副社長(右)とMr.Sandall(左)

事業などのプレゼンテーションを受けました。その後伐採現場に移動し育苗や伐採、集材や林道など実際に現場をまわりながらご案内

いただきました。

▼PAN PAC社の概要(北島を代表する林業企業)

PAN PAC社は、ホークス・ベイのフィリナキ(ネイピア近郊)を拠点とする林産・パルプ・製材メーカーで、林業事業から木材加工、パルプ生産までを一貫して手がけています。1971年の創業以来約50年間、地域林産業を支え、現在は日本の紙パルプ業界最大手の完全子会社として事業を展開しています。原料の多くに成長の早いラジアータ・パインを用い、年間約150万tの丸太、約53万㎡の製材、約27万tのパルプを生産・輸出しています。苗木の植栽から始まる持続可能な森林管理を徹底し、ホークス・ベイ地域最大の山林事業者として、従業員、請負業者それぞれ400人以上を擁しているそうです。自社森林(総面積3万7千ha)からは木材・パルプの約45%を供給し、伐採サイクルは約28〜30年で、年間約1,000haを伐採・植え替えています。

▼サイクロン・ガブリエルの被害

2023年2月、サイクロン・ガブリエルによりネイピア中心部を横切り港へと注ぐエクス川が堤防を決壊し、フィリナキの同社の拠点は最大で約2m浸水しました。最も深刻な被害を受けたのは、製材所、チップ工場、パルプ工場、そして公益事業の電気システムです。また、多くの事務所、作業場、移動式プラント、製品にも損傷が発生しました。森林では道路インフラの崩壊や損傷も見られました。

被害発生後、同社は迅速に復旧作業に着手し復興プロジェクトを開始しました。製材事業は2024年1月に再開され、続いてパルプ事業も2024年3月に再稼働しています。

この災害を通じて、同社は従業員・協力会社とともに迅速な対応と復旧の体制を整える重要性を再確認し、また、再建の過程で安全対策や耐災害性も強化され、その後の事業運営におけるレジリエンス向上につながるようになったことが活用され、全体の95%以上が機械伐採で行われています。

うです。

▼伐採現場の見学（ガバス山林）

近年の伐採現場では、ワイヤーサポートによるテザーシステム伐採が導入され、伐採作業の安全性向上に大きく貢献しています。テザー伐採は急傾斜地で作業員が地上に立つことによるリスクを軽減する手法で、現在は35〜45度の斜



テザーシステムによる伐採作業



タワーヤーダ（グラップル搬器）作業

* * * * *

伐採計画は道路インフラの要件にも影響を与え、機械化の進展に伴い、道路上で作業する重機の数も増加しているそうです。

林道整備の際には環境への配慮が徹底されています。特に道路の下に設置するカルバート（導水管）は、魚が遡上できるように設計されており、カルバートを川底に近い位置に沈めて設置することで自然な水の流れを維持しています。また、周囲の小川では小さな水生



カルバート前の小川はとても透き通っていました



現場でランチをいただきます 足元には林道に敷くシュレッド

の生き物が多く確認でき、水質が非常に良好であることがうかがえます。こうした取り組みを通じて、

地域の水生生態系を損なわない森林管理が実践されています。

安全教育にも力を入れていて、従業員のみならずコントラクター

(現場請負業者) に対しても研修や認定制度を導入し、安全水準の



左から 松木氏、現場監督のジョン氏、そして
凄腕プロセッサ・オペレーターのジャック

底上げを図る体制を整えているそうです。

▼ラジアータ・パインの枝打ち作業と間伐

枝打ちは一般的に2回実施されるとのこと。

最初の枝打ちは、樹齢約5年の段階で行い、約3メートルまで枝を落とします。この段階では手作

業で行われることが多いそうです。

その後、樹齢が進み、幹が十分に育った段階(今回の例では10年程

度)で2回目の枝打ちを実施し、最終的に5.5m程度まで枝を除

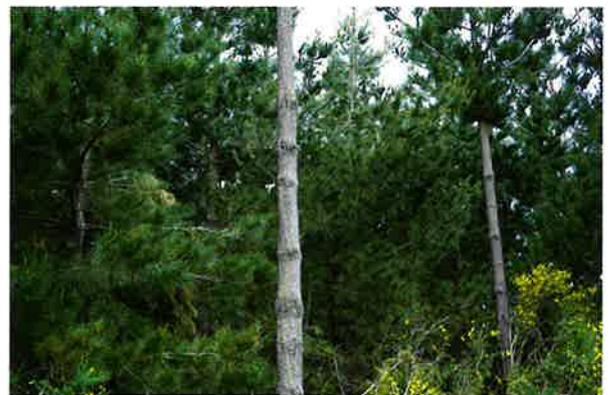
去していきます。この高さ設定は、将来の製材において節のない丸太

を5メートル確保するためです。

間伐については、この林分では植栽本数800〜1,000本のうち、成長が良く素性の良い約350本を残すよう選木し、それ以外を段階的に間伐していました。

最終的には、さらに良質な50本前後を主伐木として残す管理を行っているそうです。

また、枝打ち作業の管理やタイミングを最適化するために、ドローンによる樹高計測・成長状況の確認も行われているとのこと。ドローンで林分上空から撮影し、樹高や枝葉の分布を画像解析することで、どの樹木をいつ枝打ちすべきかを正確に判断できます。また、同じ区域内でも樹木の成長速度は場所によって異なるため、ドローンに



枝打ちされた10年生のラジアータ・パイン

よる観測により、必要に応じて枝打ちのタイミングを調整することが可能になります。



間伐作業の説明(写真は5年生の立木)

この方法により、成長を阻害せずに高品質材を最大限確保することが可能となり、従来の地上目視のみの管理に比べて効率と精度が大幅に向上しているそうです。

間伐材の集材は、ハーベスタで伐採したのち、フォワーダで搬出します。路網は作業効率を確保するため、適切に作業道を切りながら施工しているとのことでした。



ラジアータ・パインの高い樹高と整った林相

PAN PAC社の実践する先進的な生産体制や環境配慮型の取り組みは、私たちに多くの示唆を与



花山副社長とMs.Wiseを囲んで親睦を深めました



みんなそろって記念撮影

えるものでした。本視察で得られた学びを糧に、今後の改善と新たな

ニュージーランドの循環型人工林施業「ローテーション」

な挑戦につなげていきたいと思えます。花山副社長はじめご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

ニュージーランドの循環型人工林施業の歴史は約120年前にさかのぼります。過度な天然林伐採により、国土のほぼ100%を占めていた天然林は1900年代初頭には約20%まで減少しました。これを契機に、同国は持続可能な林業へ転換し、植林による木材供給が主流となりました。

植林樹種はラジアータ・パインが約91%と圧倒的で、ほかにダグラスファーやユーカリが続きます。現在、伐採・再植林を繰り返すローテーションの多くは3期目に入り、これまでのところ連作障害は確認されていません。一部の地域では4期目の植林も始まっています。このように、ニュージーランド林業は循環型人工林施業と機械化



1931年の地震後アールデコ様式で再建された街並み



ネイピア港に山積された大量の丸太

作業を組み合わせた計画的な管理により、持続可能で安定した木材生産を実現しています。
※PAN PAC社と松木氏からご説明いただいた内容を要約

後編は、次号でお伝えします



羊のステーキ



羊の国



アールデコ建築が街を彩るネイピア

特集 2 ノースジャパンス素材流通協同組合 令和7年度 第1回林業講演会 国産広葉樹利用新時代に向かって
素材生産者も意識改革！ 前編

NJ素流協は11月18日(火)、今年度第1回目の林業講演会「国産広葉樹利用新時代に向かって」素材生産者も意識改革！」を盛岡市で開催し、会場、オンライン合わせて、27名の参加がありました。

最初に、鈴木信哉理事長から、「今までは針葉樹に対する施策・方針が話題の中心でした。これは、戦後拡大造林で植えた木が伐り頃である点がポイントだと思いますが、一方で、一時期あった知床問題、白神問題をはじめ、広葉樹に関わりづらい雰囲気も引き続き続いたように思っています。



鈴木理事長挨拶

ですが、最大の問題点は、素材生産業者に広葉樹の需要が全く伝わっていなかったことだと思います。やっとな今、広葉樹利用の流れができてきたかなと感じるので、今日の講演をぜひ聞いていただければと思います。」と挨拶がありました。

* * * * *

講演①「千歳林業の林業経営について」～会社概要・取組み～、～広葉樹施業・利活用～、～社有林の活用策～」

千歳林業株式会社 経営企画部 部長 奥村 隼石氏

千歳林業株式会社

北海道倶知安町(1988年設立)に本社、白老町・岩見沢市に支店、白老町にチップ工場があり、グループ会社として倶知安林産協同組合も設立。所有山林規模の拡大や計画的な森林づくり等を行う

ている。

社員はグループ会社含め80名。

●**会社の取組み**

北海道を中心に約1万7千haの社有林を管理し、山林の保有面積は、道内資本の法人では最多、国内でも上位に位置しています。社有林には多種多様な樹種が生育しており、ニーズに合った木材の提供ができるようになっていきます(社有林は全てSG EC森林認証を取得している認証林)。

▽**新規山林取得や森林整備に取り組み目的・背景**

会社設立以来、経営不振に陥った法人が保有していた山林や不在村の森林所有者の長期無施業山林等を取得し、適宜、森林経営計画を樹立し、森林作業道の開設、除間伐、枝打ち等の森林施業を積極的に行いながら面積を拡大してきました。大面積の一斉皆伐は極力実施せず、小面積の皆伐、虫害・風倒木被害等の被害林分は適宜伐採して、年齢構成の平準化にも努めています。

社有林の7割は天然林広葉樹であ

り、人工林のみならず、天然林でもつる切り・除伐等の「天然林施業」を推進しており、各地域特有の樹種や林業経営上優良樹種の保全・育成に努めています。

▽**山林売買に係る今後の検討策**

山林売買を行う際は、収穫までの育林コストが加味されていないことが一般的です。今後、育林コストを含めた収支も計算していかなければ、山の再投資が活発にならず、放棄山林地の拡大につながるのではないのでしょうか。欧米で山林REITを運用する際に用いられるDCF法(Discount Cash Flow)の日本国内での運用も今後検討してみる価値があるのではと思います。日本国内の山林REIT市況が活性化することによって、山主への資金還流・山林の集約化にもつながると考えています。

▽**造林の現状について**

主伐量の増加に伴い、造材機械の開発が進んでも、植栽面積の漸減もあり、造林作業は数十年前と同じうえに、造林の担い手の減少・高齢化もあり、造林機械の開発・普及が急

務と考え、2022年に造林用機械の導入を始め、省人化、省力化を行っています。林野庁の実証事業についても、下刈り作業の遠隔操作という観点で参加しています。



千歳林業(株) 奥村隼右氏

▽森林作業道の重要性について

山林内の路網は人体でいう「血管」と同じであり、木材生産を効率的に行うための重要なインフラだと思っています。当社では森林作業道を中心に社有林内の路網整備を積極的に行っており、これまで約76万2千mの作業道を開設しています。課題もありますが、今後は45〜50m/ha程度の路網密度を目標に作業道の敷設を行っていきたいと考えています。

▽千歳林業(株)の今後〜山林情報のデータベース化〜

これまで蓄積してきた情報が共有されるような体制になっていないのが現状(情報の属人化)です。

そこで、自社オリジナルのデータベースを構築することで、経験年数に関係なく誰でも山林情報を把握することが可能になり、より柔軟な発想、組織決定も行いやすくなるのではないかと思います。データベース化に取り組んでいるところです。

●広葉樹の施業・利活用

2024年度の広葉樹出材量は約2万3千m³であり、そのうちの約20%にあたる4800m³が用材として、それ以外は、広葉樹パルプ・バイオマスパルプで出材しました。

多様な採材や広葉樹市況に応じた伐採計画等を立てることにより、採算確保を図っています。

▽広葉樹の価格について

銘木、原木、合板、用材は市場または取引先(納材先)との調整が生じるため、プライシングのハードルは高く、銘木、原木は市場入札によるため、価格の変動幅も大きいです。一方で、売上の大半を占めたパル

プ、ホダ木・薪については、自社生産を行えば価格の調整が自由にできるのではと考え、薪の生産工場新設、白老町のチップ工場取得で、自社で生産してみることにしました。

▽広葉樹資源の活用策

①宿泊施設へのコースター提供

倶知安・ニセコエリアの社有林から伐出された広葉樹材をコースターに加工・提供し、親子参加型のプログラムを実施しました。

②ウイスキー樽材の提供

ニセコエリアの蒸留所から、地元のみズナラの樽でウイスキーを作りたいとの相談があり、実現しました。一般的な商流とは異なる商流を採用してリスク分散をしています。

③迷木市

ニセコ雪森考舎からの相談で、パルプにもならないような曲がり・腐れ等がある材だけを集めて市場にしてみようという企画を昨年からスタートしました。クセがある材だからその需要があることが分かり、広葉樹の新たな可能性・付加価値を今後も見つけていきたいと感じました。

●社有林の活用策

①社有林の中の林道を、ロードバイク、マウンテンバイクコースとしてイベント提供。

②左記イベントの際に参加者に提供するオリジナルのスプルスビール(社有林のアカエゾマツの新芽を香りづけに使用)製作。

③Jークレジットの導入(2026年4月に発行予定)や再エネ事業体(主に風力発電事業体)への社有地の貸与等で、新たな資金源を確保することにより、重機購入や社有林整備、山林取得等の投資に仕向けることが可能になると考えています。



会場の様子

講演②「つなぐ木のいのち」信州の木を適材適所に」

信州ウッドコーディネーター

香田 るい氏

香田 るい

大学で生活デザインを学び、卒業後はオークヴィレッジ株式会社にて就職、飛騨高山（岐阜県）で経験を積む。その後、信州小諸（長野県）へ移住。国産材を適材適所に配した伝統工法の手刻みによる終の住まいを建て、夫婦共創で『そらいろの丘』を主宰。

現在は、長野県林務部 信州の木活用課 県産材利用推進室が取り組む「ウッドもつとつなぐ事業」で信州ウッドコーディネーターを務める。

●国産広葉樹を適材適所に「オークヴィレッジ」で携わった仕事

オークヴィレッジで50種類ほどの国産材と向き合ってきました。その経験から商品開発・コラボレーションを担当し、今なお愛されるロングセラー商品を育てました。

①森の合唱団

それまでの木琴の固定観念（長さを変えて音階をつくる）ではなく、同じ長さの音板で音階調律をしました。サクラ、トチ、ホオ、カバ、キハダ、セシダン等、音色が良い木であり、並べた時に彩りが美しいことも考えて商品に、その後グット・トイにも選ばれました。

②木バット不適合材の活用

ミズノ株式会社様とのコラボレーションで、野球バットに使用できなかったアオダモやイタヤカエデを、ワンコイン（五百円＋消費税）で購入できる商品（携帯ストラップ等）にして、売上の一部を、NPO法人を通して、広葉樹の森づくりに役立てていただきました。

③MOKURIN（もくりん）

株式会社フェリシモ様とのコラボレーションから生まれた木の鈴です。当初は、音響に優れるサクラ・ホオ・ケヤキ等の樹種でしたが、東日本大震災後は、東北に育つブナ、ヤマナシ等を使用し、東北6県にちなんだ6樹種の「みちのくMOKURIN」

を発表しました。こちらにも、売上の一部を、東北の森づくりに役立てていただきました。その後、『ジブリ美術館オリジナルトトロMOKURIN』も生まれました。

④カッティングボード

女性の視点から生まれるものづくりでは、女性デザイナーとのコラボレーションで、樹種の違いで四季を表現したカッティングボードを製作しました。春は「おはなばたけ」をイメージしてヤマザクラ、夏は「うみ」でホオ、秋は「おちば」でクルミ、冬は「ゆき」でシラカバ、この時初めて、ウダイカンバではなく、シラカバの白い木肌を生かした商品をつくりました。



信州ウッドコーディネーター 香田 るい氏

●信州ウッドコーディネーターとして

今年度は私や鈴木理事長を含めて9名の信州ウッドコーディネーターが、それぞれの得意分野を生かし、「信州の木をもつとつなぐ」活動をしています。信州ウッドコーディネーターは任期3年で、今年度が集大成の年です。

▽信州ウッドコーディネーターを志した背景

信州小諸での家づくりで、建材は県産材を使用しましたが、家具や床など信州の広葉樹は流通していないと言われ、近くのチップ工場では、家具に使われる広葉樹がパルプになっている現状を目の当たりにしました。私たちがより長く年輪を重ねてきた木をもっと大切にしなければ、何かアクションを！との思い、今は亡き飛騨の匠の「そんなことしたらダチカン！（飛騨弁でダメだの意）」という声を聞いたことが、信州ウッドコーディネーターを志す動機となりました。

①1年目

長野県には卓越した技術や熱意あ

る匠が点々と活躍していることを知り、その点を線に、その線を面に、もつとつなぐことがお役目と考え、

信州の木のつくり手とつかい手をもつとつなぐ場を創出する「チーム信州の木プロジェクト」を発表し、情報配信・情報共有に努めています。

②2年目

信州木工会会長の谷進一郎氏のお力添えにより、同会が25年続けている木工研究会として、長野県林業総合センターで「信州の広葉樹材活用講習会」を開催しました。後日アンケートの集計と分析も行った結果、信州の広葉樹材を活用したい木工家がたくさんいながら、県内で入手するルートが確立されていないことが分かりました。

その後、長野県森林組合連合会の木材市へ通い、信州の広葉樹の丸太の動向をリサーチしています。県内の木工家は、他県の商社から信州の広葉樹材を購入しているケースも多く、もつと県内で落札され、県外にはもつと高値で落札していただけるよう、調査と分析を進めているところ

です。

一方、リサーチの一環で、薪材の貯木場を視察しましたが、チェーンソーで割りやすい細かい方が高値、太い方が安値という現実、鈴木理事長から「ナラは末口20cm上で用材！」とアドバイスを受け、「混ぜれば新分ければ宝」という標語を作りました。

③3年目

少しずつ信州の広葉樹材が入手できるようになり、集大成の3年目、信州の木を活用した木工品・精油製品の展示販売会「つなぐ木のいのち展」を開催しました。長野県は後援として、信州木工会にご協力いただき、昨年度の講習会の講師と参加者で実行委員会を立ち上げ、意見交換を重ねて開催に至りました。

「つなぐ木のいのち展」には長野県のすべての行政区分10地域から18事業者が参加、2日間で千人超に会場いただき、その成果は木材ライター赤堀楠雄氏にも執筆いただきました。
●最後に
私は、何事も信念を貫き、熱意を持ってやり遂げることを大切に考え

ていますが、信州の広葉樹材活用も少しずつ風向きが変わり、有効活用することの意義に共感いただけるようになりました。

私の活動のキャッチフレーズは「小さな種からおおきな力へ」です。木と向き合うことを生業としている私たちは、木と同様に根を深く張り、枝葉を広げることが大事であり、小さな木工品がきっかけとなり木への親しみにつながると考えています。ぜひ皆さんのちいさな種を育て、いっしょにおおきな力となるよう、一緒に前進することができたらと思っています。

* * * * *

講演③「家具づくりにおけるシン・国産材活用」

カリモク家具株式会社 取締役 副社長 加藤 洋氏

カリモク家具株式会社

創業者・加藤正平氏が愛知県刈谷市に木工所を創設。現在の本社は愛知県知多郡東浦町。

7つの家具工場と4つの家具資

材工場（木材調達乾燥↓製造↓販売まで垂直統合）で、100%国内ですべての家具を製造している。社員数は約1650名。

●カリモク家具(株)のものづくり

旭川や高山といった家具の産地は、匠や船大工の技術等「その土地に木工のDNAがあった」と聞いています。

私たちの場合、愛知県刈谷市・東浦町エリアはそういった木工のDNAは無いエリアでしたが、製造業が盛んでしたので、そこから管理手法等を学びながら独自のものづくりを進めてまいりました。

この特質を弊社では、「HIGH TECH(ハイテック)HIGH TOUCH(ハイタッチ)」と呼んでいます。ロボットやデジタルといったテクノロジーを使って対処できることは、徹底的にテクノロジーを使い、人できないと出来ないことに人が集中できるようにします。
そうすることで、工業製品に求められる均質性、効率性、安定性を一つ一つの製品の基本にしながらも、

人の手がかかることによつて、普遍的な価値・クラフト感をまとわせた」と考えています。

●製品完成までの流れ

秋田工場の乾燥施設では、まず天乾を行つて人工乾燥をしますが、天乾の期間は樹種や時期、板の厚み等で変わります。ここが、良い家具を作る最大のポイントだと認識しているので、カビが生えていたり、水の抜け方が遅いということがあれば、位置を動かしたりこまめに手当てしています。

木取りの工程では、長さを先にカットしてから幅をカットするものもあれば、その逆もあります。弊社ではこれを2刀流と呼んでいます。どちらが適切かはまだまだ模索中です。小さな部材の接着やフィンガージョイントもお見せしたいと思ひます。なるべく歩留まり良く、木は木として消費者の方にお届けしたく、細かい木でも家具として何とかして付加価値をつけて生かせないかと取り組んでいます。

家具製造工場では、弊社の木工の

特徴である、ハイテック・ハイタッチを実践すべく、多能工、セル生産方式を採用しています。

木製家具は非常に労働集約的です。

したがって、同じような製品・サービスしかできないと、人件費の安い国には到底太刀打ちできません。そのため、フレキシビリティとスピードをいかに確保するか、海外ではできないものは何か？を見出す中でセル生産方式に至りました。

裁断縫製工場でも、木工と同様に、セル方式で対応し、完成、検査、出荷されます。



カリモク家具(株) 加藤洋氏

●国産広葉樹と向き合う

今、国産材は、私たちの業界でも注目を浴びています。弊社としては、日本の森林・林業のように、私たち

を支えていただいている産業に将来的な懸念事項があるなら、ものづくりを通じて解決したいと思つています。

したがって、国産材の中でも、曲がった木や節がたくさんある木をどう生かすか、様々な樹種をできるだけ家具づくりに生かしたいという思いで取り組んでいます。

そこで、社内外の様々なデザイナー（国籍・年代を問わず）とともに、日本の木を使った、世界に通用する製品を作っていくプロジェクトを2009年から始めました。

その中の代表的なコレクションが「KNS(カリモクニュースタンダード)」で、価値が低いとされている木をデザインとものづくりで生かすブランドです。

2018年からは、「KARIMOKU CASE(カリモクケース)」というコレクションを始めました。キッチンや窓枠といった分野に国産広葉樹の活躍の範囲を広げるとともに、建築家のリノベ案件に向け、彼らが欲しいと思えるものを国産材で作って

きました。

□MAS(マス)というコレクションは、家具ではあまり使われない軽い広葉樹を使えるプラットフォームとして立ち上げました。

こうしたコレクションを当初は国内で発表しましたが、世界への挑戦として、ミラノで行われるデザイン展示会にチャレンジしました。日本らしい落ち着いた空間を展示し、評判も引き合いもただけではありません。他にも、ミラノ市内での展示会や、家具の聖地デンマークのコペンハーゲンでの展示会にも出展しました。

展示会の他にも、カリモクがどう木と向き合い、どう生かそうとしているのか、プロダクトやイベントを通じて知ってもらおう場所を設けています。「KARIMOKU Commons(カリモク commons)」では、オフィス向け・家庭的な家具や、ケヤキを使った新作等を展示しています。「KARIMOKU RESEARCH(カリモクリサーチ)」では、特定のコレクションを置くのではなく、カリモクが木を使って何を作ろうとしているのか、

なぜそうするのか、今後どうしていきたいか等を展示しています。プロの建築家やデザイナーも来てくれるので、彼らの知見を取り込んで交流をしています。

その他にも、東京で行われる「ORGATEC（オルガテック）」というオフィス家具展示会にも出展、「オフィス家具」というジャンルではまだまだこれからですが、弊社なりに、こんなものがオフィスにあつたら良いのではないかと？というものを展示しています。

大阪万博では、9か国のパビリオンに家具を採用いただき、中でもスイス館では、スイスの学生がデザインしたものを、私たち日本のメーカーが日本の木を使って作るという取組みも行いました。

家具というカテゴリー以外にも、化粧品、文房具、ロボット等異業種様とのコラボも積極的に行って、国産材の可能性を広げるところです。これからも、木の素材の良さに触れていただく機会を作る必要があると感じています。

第2部パネルディスカッションの内容は、次号でお伝えします

トピックス

女性経営者ランチミーティングを行いました

組合として女性の経営者を支える取り組みを進めていくため、まずは皆さんの率直な声を伺う場として、4名の女性経営者にご参加いただき、11月18日（火）に盛岡市で、ランチ形式の交流ミーティングを開催しました。

ミーティングを通じて、女性経営者の間には「情報を共有したい」、「悩みを相談できる場がほしい」というニーズがあることが確認できました。まずは、参加者の輪を広げながら、継続的に交流できる場を整備するという方向で支援に取組んでいく方針です。

女性の経営者の皆様、お待ちしております！

省力・低コスト造林技術の普及に向けた研修会が行われました

10月24日（金）、青森県八戸市及び岩手県洋野町において、一般社団法人日本森林技術協会が主催する「省力・低コスト造林技術の普及に向けた研修会」が開催されました。

本研修会は、令和7年度林野庁委託事業「省力・低コスト造林及び森林整備事業のデジタル申請・検査等の普及調査委託事業」により、全国4会場で開催されるものです。

午前中の室内研修会（八戸市）では、林野庁が制定した「造林に係る省力化・低コスト化技術指針」の解説、（国研）森林研究・整備機構 森林総合研究所 宇都木玄氏による省力・低コスト造林技術に関する講演が行われました。

午後の現地検討会（洋野町）では、当組合員である有限会社九大県北農林の作業現場に移動し、造林作業省力化のための伐根破砕機、下刈り機械等による作業を見学しながら意見

交換が行われました。



現地検討会の様子

第61回全国林材業労働災害防止大会が開催されました

11月21日（金）、山形県山形市において、林業・木材製造業労働災害防止協会が主催する、第61回全国林材業労働災害防止大会が開催され、当組合から小野寺営業企画部長ほか3名が出席しました。

大会は、毎年、林材業関係者が一堂に会し、労働安全衛生に対する意識の高揚を図るとともに、参加者のみならず、全国の林材業関係者に労働災害撲滅への決意を発信するもの

です。

地元林業事業体による活動等事例の紹介及び特別講演などのほか、大会式典では労働災害防止活動に顕著な功労・功績のあつた安全功労者などの表彰が行われました。

次回大会は熊本県での開催となります。

NJ素流協 令和7年度 第4回理事会 開催

組合員数が250名を超えました

12月4日(木)、盛岡市において令和7年度第4回理事会を開催し、組合員加入、就業規則等の一部変更について承認をいただいたほか、令和7年度上半期事業の報告をはじめとした10件の事業報告及び4件の報告・相談事項を説明しました。

今回の理事会での承認を以て、NJ素流協の組合員は250名を超えました。今後も、組合員ファーストで、当組合の理念である「ウィンウィン」「ギブアンドギブ」に邁進してまいります。

林野庁若手職員

実務研修を受けて

林野庁林政部木材産業課
木材製品調査班
建築用木材企画係長

森口 幹太

11月17日(月)～21日(金)に、

林野庁職員 森口幹太様が当組合の研修を受講され、体験記事を頂戴しましたのでご紹介します。

この度、林業等実務研修として、ノースジャパン素材流通協同組合(以下「NJ素流協」という)において令和7年11月17日(月)～21日(金)に受入れていただきました。初日にNJ素流協の組織概要や役割を御説明いただき、その後、4日間にわたり、素材生産や製材工場、バイオマス発電所といった取引先のみならず、盛岡市役所や盛岡木材流通センター、材木育種センターまで幅広く御案内いただきました。所感を交えながら、視察先等の概要を取りまとめましたので御報告いたします。

○NJ素流協の組織概要・役割

NJ素流協は、合板工場向けの素材を取りまとめ共同販売するために設立された組織を前身としていることから、現在でも合板(とLVL)用素材の取扱量が多くを占めています。また、製材や集成材、燃料用など、多岐にわたる取引先を拡大しています。

共同販売に当たっては、NJ素流協が窓口となつて、工場との価格交渉など日々の調整業務に加えて、各工場の納入規格の平準化などに取り組みしており、組合員が素材生産に専念できる環境となるよう、常に改善が図られています。

素材生産業者においては、山主の希望に沿って生産し、A材だけ出荷など品質が選べないことや、伐採時期が自由に選べない不安定さがあると思われるところ、NJ素流協が毎月把握している組合員の納入量を基に調整弁として働くことで、年間を通じた素材生産業者の販売・収入の安定に寄与していると感じました。

また、NJ素流協が商流を担い、

素材生産業者が物流を担う商物分離

取引であることから、在庫量などの情報把握や丸太品質の保持などの仕組みが重要になります。NJ素流協では、あらかじめ組合員に納入規格を図や数字で説明するとともに、営業担当者が定期的に素材生産現場や工場に訪問し、品質を確認しフィードバックを行うなど、綿密な関係性を構築することで取引を円滑化していることが確認できました。

情報伝達に関しては、東北地区原木トラック協議会の設立から7年を経過し、物流事業者との関係性が一層強まったことで、より新鮮な需給情報などが把握でき得るため、きめ細かな情報流を構築し、更なる取引先の拡大や取扱量の増加を図ることができる環境が整いつつあると感じました。

○素材生産に関すること

生産に当たって、単に注文どおりに採材するのではなく、用途などを聞き取り、山のこと、丸太のことを考え、無駄を少なく出荷できるように、という視点を持って生産されて

いるところが印象的でした。また、事業体の方が「林業は『百聞は一見に如かず』だ」とおっしゃっていたとおりで、実際に林業機械が稼働し伐倒する現場を見学することで、その労力や機械の特性を学ぶことができ、そのスケールの大きさから作業安全性確保の重要性を肌で感じ取ることができました。

○木材利用に関するNJT

原木投入後からラミナ製造まで人が立ち入らない製造ラインの視察はこれまで機会がなく、貴重な経験となりました。また、その先に端材の破碎ラインを組み込み、チップやお粉の製造を効率化している点や樹皮も破碎してバイオマス以外の用途の可能性が見出されている点も印象的でした。

バイオマス発電所においては、事業体が山林事業の経験を活かし、効率的な林地残材の活用はもとより、全量チップにするのではなく、良材は原木として販売するなど、N J素流協の理念である、三方良しに「丸太良し」を加えた、四方良しに通ず

るものを感じました。

○広葉樹に関するNJT

原木市場を訪問すること自体も初めての経験であり、多種多様な原木が並び・積まれている光景は圧巻でした。木口断面により伐採から出品までの期間の長短が推測できることや、樹種に応じて様々な活用用途がある事を教えていただきました。木口断面で品質を確認する点は、尾の断面を確認するマグロのセリ場を彷彿とさせるものでした。今後とも原木市場に足を運ぶ機会を設け、樹種判別や評価の目利きを養っていきたいと思います。



面白い模様を持つブナ

○育種に関するNJT

育種というと農畜産のイメージが先行し、それらは比較的短期間で結

果が得られるところ、林木育種では、結果を得るまでに時間を要するため、過年度データの整理や数十年生の検定林調査などで経年変化を分析しつつ、新たな品種も後世につなぐという、ある意味人生をかけた業務であるように思えました。



雪深い場所での施業

○まとめ

5日間の研修により、流通とは、需給調整とは何かを改めて考えるきっかけになりました。単なる数字合わせに留まらず、商取引の中で川上・川下のそれぞれが歩み寄り、品質や用途など一歩踏み込んだ情報を積極的に把握・共有することの必要性を感じました。

本研修で学んだことを念頭に、また、現場の立場での視点を忘れずに、

今後の業務に取り組んでまいりたいと考えています。

最後になりますが、御多用の中、受け入れていただきましたN J素流協の皆様をはじめ、各視察先の皆様、本研修に関与いただいた方々に御礼申し上げます。

お知らせ

花粉を採取するスギの花芽の情報提供にご協力をお願いします

令和6年度より、スギ花粉を集めて治療薬の原料に提供する事業に取り組んでいる組合員さんがいらっしゃると思います。今年も花芽が多いという触れ込みですが、実際に取り掛かってみると、花芽の付きが今一つで、花芽の確保に苦労されているそうです。花芽は日当たりの良い道際や林縁に多くつきます。

採取できるのは、開花するまでの限られた時期(2月上旬頃まで)

となるので、早急に情報提供を戴きたくお願い申し上げます。次のような個所がありましたら是非ご紹介ください。

- ①所有林のスギに花芽が多くついているので、無償で枝払いをしてもらえるのなら協力したい。
- ②花芽が多くついている現場に心当たりがある。伐採作業の支障にならないのであれば紹介したい。

- ③屋敷林のスギに花芽が多くついている。家人が杉花粉症なので、是非花芽を取って欲しい。
- ④既に堆積させた枝に花芽が多くついている。

何卒ご協力をお願いいたします。

秋田県で「第6回スギ高樹齢原木展示即売会」

スギの出品にご協力下さい

スギ高樹齢原木展示即売会が、令和8年1月23日(金)に秋田県木材産業協同組合連合会の主催で

開催されます。

この展示即売会は、秋田県銘木センターの「第31回東日本銘木展示会・初市徳市」と併催されます。

今年もたくさんのお客様からの出品をお願いしたく存じます。詳しくは、別途ご案内いたしますので、営業企画部までお問い合わせください。

■ N J 素流協営業企画部
019-652-7227

道路開通のお知らせ

現時点(12月10日時点)での主要な道路開通情報及び開通予定の道路をお知らせします。

【岩手県】

- ・北上市相去 国道4号線 三菱製紙株式会社付近(2.5km) 4車線拡幅
- ・盛岡市前潟 国道46号線 盛岡西バイパス(3.6km) 4車線拡幅
- ・西和賀町 国道107号線 大石トンネル(1.8km) 全線開通

【宮城県】

- ・古川市 国道108号線 古川バイパス 古川宮内〜古川稲葉(1.6km) 全線開通(12月21日予定)

【秋田県】

- ・日本海沿岸東北自動車道 二ツ井今泉道路 小繋〜今泉(4.5km) 令和7年度開通
- ・東北中央道 横堀道路 下院内〜雄勝こまち(3.7km)

【山形県】

- 酒田市 国道344号 安田バイパス 酒田市上安田〜上野曾根(3.08km)

「〇〇県 道路開通予定」等で検索すると詳細情報を見ることができ、より移動が便利になりますね！

組合員からの研修生を引き続き募集しています！

後継者に勉強させたい！等、組合員からの研修生の受け入れを引き続き募集します。

お問い合わせは、経営企画管理部までお願いいたします。

N J 素流協 年末年始休業のお知らせ

年末年始につきまして下記のとおり休業いたします。

休業期間：12月27日(土)～1月4日(日)

休業期間中はご不便・ご迷惑をおかけいたしますが何卒よろしくお願い申し上げます。営業開始は1月5日(月)からとなります。

合板用アカマツ納入にご協力をお願いします

合板用アカマツ原木が不足しています。納入のご協力をお願いいたします。

詳細やご相談は営業企画部までお問い合わせください。

ちよつと気になる木の話

売上を伸ばす(在庫も多い)ためのスーパー広告を踏襲ー丸太不足の工場の広告は、これに似せて?ー

毎日のように、新聞にスーパーの広告が多量に入っている。この内容を見てみると、本日限り〇〇円、本日お1人様2点限り、1週間限定お得価格、魚の日・肉の日安いよセール、まとめ買いするとお得(〇〇円以上でプレゼント有り)、ポイント割増セール、営業時間拡大、食品ロスをなくすため時間限定割引、品質不統一品安売り等多種多彩である。

何とかお客さんを集めて、在庫が多い商品を売り、売り上げを伸ばそうとしている。もちろん、利益を無視した客寄せパンダ商品もある。

こうした広告を踏襲して、丸太不足が深刻な時に、国産材工場の丸太集荷キャンペーンを考えてみよう。

「キャンペーン例」

●工場の丸太在庫、底つきそうです。今なら納入数量上限なしのフリー納入できます!

●工場での樹材種が不足です。

スギ4m〇cm〜〇cm A材のみ、今月だけ1000円/mプラスで購入します!

●とにかく丸太持ってきてキャンペーン!! 多少古い丸太もOKです。A材欲しいですが、20%程度B材が混ざっていても受け入れします!

●一週限定 納入数量拡大セール!! この期間のみ2000円/m特別プラスします。

●納入お願いします! 足りないアカマツを持ち込むと、来月からスギの納入量発注増やします。

●スギ3・65m不足で困っています。3・65mを100m納入できる方には、スギ2mも25m納入受入します。

●合板の日特別キャンペーン! 当日のみ納入者に御礼の枠を差し上げま

す。

●納入(営業)時間を延長して、8

時〜17時を6時〜19時に特別土場受入します。お待ちしております!!

●納入していただいた方にスタンプを押します。スタンプセール実施!! 10個スタンプが貯まると、特別枠が付与されます!!

* * * * *

こんな感じかな? でも本当は違うんですよ。

かつての原木市場全盛時代なら、工場側の川中の在庫過剰になると買わないので丸太が売れず、値下がりする。そうすると、山側の素材生産量を減らして、しばらく出品量激減。そこで、工場側が仕入せざるを得なくなり、丸太単価が上昇し、今度は山側の供給量増加となり、価格の乱高下が起きたのである。

丸太直送時代でも、同じと言えば同じである。需給が緩むと単価は下がる。結果、出材量が減少する。もちろん、樹材種や加工工場の生産品目の需要状況も多岐であるので、素

材生産量が減らないが、伐る山(樹材種)が大きく移ることもある。

川中は丸太が足りないとメツセージを出せば、「単価上げるよ」と川上から言われ、川上は丸太が余っているとメツセージを出すと、「そんなら買いたたくぞ」と言われる心配(常識と今でも認識している者も多い)である。

本当は、川中の丸太が足りないなら、「今まで世話になったし出材協力しようよ。」川上の丸太が余っている人がいるなら、「今まで世話になったし、買ってあげますよ。」が理想である。それには、工場の在庫できる土場を3〜6か月分、外材時代と同様に整備も必要がなく。経理担当なら「資金を寝かせずにジャストインタイム納入にしろ」と言いそうだが? いずれにしても、ウインウインになるように、製品価格高値安定で、丸太の量も単価もそれに合わせた、「ちよつと高値安定の新時代へ邁進しましょう!!」でも、スーパーチラシの木材版チラシも見たいですね皆さん。

令和7年11月分の販売実績

樹種	合板・LVL用			製材・集成材・その他用			計		
	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	12,359	103.3	102.0	18,013	129.1	168.2	30,373	117.2	133.0
カラマツ	6,011	121.4	107.5	1,986	818.4	1,361.6	7,998	154.0	139.4
アカマツ	3,358	157.7	186.0	32	60.6	21.2	3,390	155.3	173.2
その他	30	168.3	*	708	164.7	476.3	738	164.8	496.3
合計	21,758	114.2	111.5	20,740	141.3	185.9	42,499	126.0	138.5

樹種	燃料用		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	5,937	95.7	297.7
カラマツ	8,139	229.0	214.6
アカマツ	1,181	139.1	134.6
その他	1,858	223.3	360.1
合計	17,115	149.6	238.4

樹種	今年度累計			
	合板・LVL用 (m³)	製材・集成材・その他用 (m³)	計 (m³)	燃料用 (t)
スギ	94,434	128,889	223,324	33,129
カラマツ	50,346	3,472	53,818	36,188
アカマツ	18,698	242	18,940	7,016
その他	101	2,198	2,298	6,813
合計	163,578	134,801	298,379	83,146
目標達成率 (%)	65.4	72.9	68.6	69.3
計画量	250,000	185,000	435,000	120,000

注)*印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【令和7年12月の需給動向】

- 製材・集成材工場の原木在庫は減少しており、特にスギの引き合いは強く、この傾向は当面続く。
- 合板工場は依然、納入制限が続く。しかしカラマツ、アカマツは出材量も少なく、引き合いは強い状況。
- バイオマス材は新設発電所の引き合いもあり、納入の要望が多くなっている。

耳からウロコ

突然の支障木伐採が…

小学生のお手紙が宮崎県知事へ

昭和57年の思い出話である。東京から宮崎県須木村（現在は小林市）の製材事務所に赴任した。小林市から山越えした、本当に山に囲まれた山村であった。当時、特別経営区時代の人工林スギ（1町歩1万石）の枝打ち済みの手入れの行き届いた超々優良林分だった。余りに太すぎて、元玉一丁（8m）しか集材機に吊るせず、輸送用のトラックに元玉だと3本しか積めなかったが、出材材積は巨大だった。

そうした中、有名な長崎大水害と同じ日に、現場へ行く舗装道路が山崩れで通行止めとなり、別ルートで熊本県へ入り、逆方向から宮崎県に入る等、突然の大変な自然災害に遭遇した。

こうした状況の中、更に、突然の支障木伐採の仕事が舞い込んだ。一体何なの？と主任に聞いたら、次のような説明があった。

須木村の田代ヶ八重集落の小学生から知事宛てにお手紙が届き、それを知

事も読んだ。内容は、「私は宮崎県知事の名前も顔も知りません。私のいる所では、宮崎県のテレビが映りません。知っているのは、熊本県の知事です。是非、お顔を見たいです。」だったと記憶している。

当時の宮崎県知事は、松形祐堯知事である。元林野庁長官で、小林高校出身なので、地域が近く、即座に指示を出したのだろうと思った。

ところが、この田代ヶ八重集落は、山越えが厳しい場所（孤立単独集落かな）にあったが、沿線の周りは全て国有林のため、国有林を通すしかなかったのである。当然、支障木伐採が必要となり、突然の仕事となったのである。

須木村の役場所所在地でも本場の山村であり、そこから更にすさまじく遠かったと記憶している。真に、熊本県へ抜ける方ははるかに近かったのである。

小学生のお手紙は効果抜群だったのである!!でも本当は、親かだれかが小学生の児童に「書いてみて」とお願いしたのかも知れないですね。即反応は、松形知事が元林野庁長官だったのもキーだったかもですね。